

思い出・展望の記

新米校長の思い出

第二十八代校長(平成五～七年度)

小野寺 清

私は、平成五年から平成八年までの三年間、能代高校にお世話になりました。

赴任前年の平成四年は、硬式野球部と軟式野球部とともに全国大会出場という栄誉に輝き、また七十周年記念事業の一環として前庭の整備が実施されるなど、全県はもとより全国に、「能代高校ここに在り」と名を知らしめた極めて充実した年でありました。

この実績を椎名校長から引き継いだ私は、これ以上望むべくもない、ある意味では頂点に立っていると言っても過言ではない能代高校をどういう方向に進ませるべきか、正直戸惑いを感じておりました。

しかしながら、結局は、学校がやるべき事は唯一、お預かりした生徒諸君一人一人を立派に育て上げるしかないのだと改めて決意し、学校経営に着手したのであります。

とにかく授業の充実

を原点とし、「朝八時からの自学自習時間」や「七校時目の選択授業」の設定、推薦入試

や就職の決定した生徒

に対して、授業以外に身に付けておきたいポ

ランテニア活動、ワープロ等を行う「総合教

養講座」など、現在では当たり前のようにど

この学校でも行っていることですが、当時と

してはまだ全国でも珍しく、県内ではまった

く例のない手法を大胆に取り入れ、生徒一人

一人のニーズに応じた学習活動を実施しまし

た。

また、同窓生に対する感謝と敬意の意を表すため、七十周年記念事業の一環として、同窓会から推挙された六十余名の方々から「人生の一言」を色紙にしたためて頂き、これを校長室前に展示いたしました。「これ、俺のおじいちゃん」と自慢げに話す生徒を見て微笑ましく思うこともありました。

在任中は、勉学のみならず、軟式野球部の全国大会準優勝や柔道部の躍進など、部活動でも大きな成果がありました。先生方には、能代高校が文武両道の県北の雄として存在するために、絶えず斬新なアイデアと献身的な努力を強く望んだこともあり、やや批判の向きもありましたが、それを成し遂げること

ができましたのは、学校の進むべき方向に対し、PTAの皆様の絶大なご支援と、先生方の公私の分け隔てのない生徒への熱い思いがあったからだと思っております。

もう早いもので、十年の歳月が経ちましたが、非常に嬉しいことの一つは、当時若手と言われていた先生方の多くが、現在県内の教育界で中心となり活躍していることです。

今はただ、能代高校の更なる発展を祈り、同窓会、PTA、先生方、生徒の皆様にありがとうと申し上げたい気持ちでいっぱいです。

校歌について

第二十九代校長(平成八～十年)

秋 元 正 英

秋田県立能代中学校校友会発行の『校友会誌』第二号に、「歌詞は知名の大家に作って貰う事となった。そして選びあげられたのが現代の国文学の大家、東京帝大の藤村作博士である。曲も先生の御知り会ひの東京音楽学校教授岡野貞一先生に藤村先生から特に御願ひして下さって、今のような立派な歌詞と曲の校歌が出来上がった」と書かれている。

藤村教授はその頃本校に勤務していた今福謙蔵先生の東大時代の恩師にあたる方である。

今福先生が藤村教授に能代の様子を語って出来上がったのが「そのかみ遠し 数千年 尽させぬ流れ 米代の」の本校校歌である。(戦後一部改詞)

お二人の経歴を紹介しよう。

藤村教授は明治八年(一八七五)福岡県柳川生まれ、明治二十八年(一八九五)旧制第五高等学校(熊本)に入学。旧制松山中学(小説『坊ちゃん』の舞台)から転勤してきた夏目金之助(漱石)から英語を教わる。明治三十一年(一八九八)東京帝国大学文科大学国文科に入学。ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の講義から多くの示唆を受ける。明治三十四年(一九〇一)卒業と同時に旧制第七高等学校(鹿児島)教授となる。明治三十六年(一九〇三)広島高等師範学校教授。明治四十三年(一九一〇)三十五歳の若さで東京帝国大学助教授となる。大正十一年(一九二二)四十七歳で教授となる。昭和二十八年(一九五三)動脈硬化症のため死去。享年七十八歳であった。専門は上方文学で、「近世小説研究」で文学博士の学位を授けられた。また、雑誌「国語と国文学」「解釈と鑑賞」を編集発刊し、国語教育者の育成にも努めた。

岡野貞一教授は明治十一年(一八七八)鳥取市に生まれる。明治二十五年(一八九二)十四歳の時、鳥取の教会で洗礼を受ける。明治二十九年(一八九六)東京音楽学校(現在

の東京芸術大学音楽学部)に入学、卒業と同時に研究科に入り唱歌の指導を受け持つ。明治三十八年(一九〇五)二十七歳で助教授となり、文部省唱歌編纂委員(構成六名)となる。この頃「春が来た」等、次々と唱歌を作曲。大正十二年(一九二三)四十五歳で教授に昇進する。昭和十六年(一九四一)急性肺炎で死去。享年六十四歳であった。岡野教授が作曲したものに

春が来た ♪春が来た春が来た

日の丸の旗 ♪白地に赤く

桃太郎 ♪桃太郎さん

朧月夜 ♪菜の花畑に入日薄れ

紅葉 ♪秋の夕日に

春の小川 ♪春の小川は

故郷 ♪兎追いしかの山

旧制山形高等学校寮歌 ♪峰巒めぐる東北

の・・・等がある。

ある音楽家は「岡野さんの曲には小さい頃の教会での出会いの影響が濃く、曲に『祈り』がただよっているように感じられる」と書いてあった。また、「現在の小学校音楽唱歌共通教材二十曲の約三分の一の六曲を占め、まさにわが国の唱歌名曲の原点となっている作曲家である」とも書いてあった。

熱心なクリスチャンで、四十年もの間、本郷の教会でオルガン奏者を務めたという。岡野さんの名曲が日本人の琴線にふれ、日本人

の心情をどれほど育んできただろうかと思うと、その偉大な人物と音楽の持つ力に改めて驚嘆するばかりである。

校歌を当代の第一人者に作詞・作曲を依頼したのは、秋田中学、大館中学、横手中学、本荘中学等の先輩校からの遅れを取り戻したいという草創期の願いからではなかったかと思われる。

七十有余年、歌われてきた校歌には母校愛という魂がこもっている。能代高校生の在るべき理想像が彷彿されている。校歌を大切にしよう。大切にすることは大声で歌うことである。すばらしい校歌である。もつと皆で大声で歌おうではないか

(平成九年四月生徒への講話から)

思い出すこと

第三十代校長(平成十一～十二年度)

清野宏隆

私は、平成十一年四月から十三年三月までの二年間と平成八年度教頭として一年間、合わせて三年間母校にお世話になりました。

以前、能代山本地区に勤務経験のなかった私にとって、本校生徒の印象はとても新鮮でした。元気なあいさつ、私語のない集会、熱

心な朝学習、完歩率の高い十里強歩、自主的で活発な能高祭や体育大会。特に、雨や風をもとめせず自転車で元気に登校する生徒たちにはたくましさを感じました。

学習に対する姿勢も良好でした。平成十二年と同十三年三月卒業生の大学・短大進学率は七十五%程で前年に続いて全県トップクラスを維持。平成十二年には国公立大の進学者数が百となり、私立大の進学者数九十七を上回りました。この成果は、教育熱心な先生方の行き届いた指導と生徒の努力によって生み出されたものと思います。

平成十二年には、五十五分授業を導入しました。また、理系コース充実のため理数科の設置を県に要望しました。

この年には、イギリスのグレシャム高校との間でテレビ会議システムによる国際交流を実施。生徒は国際化、情報化の時代を最先端の通信機器を通して体験しました。

部活動の活躍は学校の大きな願いです。運動部はあと一歩及ばず全国大会への団体出場を逃しましたが、文化部は全国大会出場数が増えて話題となりました。

P・T・Aなどの四会と同窓会からは学校の教育活動に対し、物心両面にわたるご支援をいただきました。同窓会のご協力により、平成十二年に創立七十五周年記念講演会（西澤潤一岩手県立大学長）を開催しました。この年

がミレニアム、翌年が二十一世紀という節目の時であったことをなつかしく思います。

学校周辺の環境はここ数年で大きく変化しましたが、すばらしい校訓「至誠力行」の精神は生徒に受け継がれていくことでしょう。

創立八十周年おめでとうございます。

創立八十周年に寄せて（追憶）

第三十一代校長 平成十三～十五年度

阿部 正博

創立八十周年を心よりお祝い申し上げます。「至誠力行」のもと師弟共に建学の精神に思いを致し、歴史と伝統を引き継ぎ更に発展させようと心新たにしている事と思います。

平成十三年四月から平成十六年三月までの三年間、楽しく充実した日々でした。ご支援くださいました同窓会やP・T・Aの皆様、教職員や生徒に厚く感謝申し上げます。

能代高校への勤務が決まったとき、本校同窓の先輩教師や関係者の方々から激励と共に「能代高校を頼む」と言われ、大変緊張した事や着任式で生徒や教職員に紹介し、本校の歴史と伝統や使命を話した事を思い出します。三十数年前、高埕に移転した当時の景観がない学校周辺の変化に驚くと共に、正門を通

り校訓の石碑を目にし、大地にしつかりと根を張り手入れされた松の木々に、引き継がれた歴史と伝統の足跡を感じました。

国の動きに沿って教育改革が進められ、県の第五次高校総合整備計画も着任した年度から実施されました。平成十四年度の学校五日制、翌年の新教育課程移行への対応、更に理数科の設置など、夜遅くまで会議をしたこともありました。先生方の叡知のお陰で、学問を愛し、心身を鍛え、誠実な態度で楽しく活力ある学校生活ができるものと考えています。

平成十六年三月に卒業した生徒全員を校長室で、短時間でしたが面接した時のことも思い出されます。学校生活や進路のこと等を聞きました。臆する事無く、日常の姿で話してくれました。礼儀正しく明るい表情は好感が持てましたし、二年生の理系生徒に教員最後の授業をやらせてもらったことも良い思い出になりました。向学心を持ったすばらしい生徒と共に過ごした三年間でした。

校舎にも、高埕に根付いた木にも、関係者の汗と涙の結晶を感じ取れます。この歴史と伝統が守られ発展することを願ひ結びとします。「歴史は古きといえども、常に新しきを」（ハイネ）

文武両道

十二期(旧制十二期)

花下 哲夫

創立八十周年、心よりお祝い申し上げます。かつて、能中健児と蜚声を張り上げた樽子山の校舎は今はないが、校門に通じる「すずかけ」の並木道は、随分ハイカラな印象が強く、今も通る度懐かしく思う。昭和十一年、旧制十二期の私達の入学から六十九年、半世紀を遥かに超えた歳月になった。入学当時は戦時体制も色濃く、制服、制帽は一年前から国防色で、制服は町の洋服屋さんが総出で一人ひとりの寸法を計り、今で云う特注にもかかわらず、出来上がった服はだぶだぶ、君達はずぐ大くなるからと宣う。制帽は黄線一本が入り、ペンと剣で、校是「文武両道」を示し、Nと中の文字の校章だった。又登下校、外出には必ず着帽に黒の編上靴を。先生や先輩には拳手の敬礼が決められ、教科には柔道や剣道が正課となるなど、私達の身辺はすっかり様変わりした。こんな事を云うと随分窮屈に思ふかもしれないが、樽子山の校舎は常に元気が満ち満ちていた。個性豊かな先生方に、文武両道を厳しく鍛え込まれた先輩達の方が、何事にも挑戦する根性を私達に受け継がせたように思う。私は淳二小三年から剣道

を始め、念願の全県優勝して、勇んで剣道部に入つたものの、上級生との稽古では、打つては返され、体当たりでは転がされ、もたもたしていると突かれ通してしたが、この五年間、武衛先生には、基本打ちの稽古と姿勢や竹刀の扱いも厳しくご指導いただきました。この能中での剣道稽古が、私の人生を常に支えてくれたことを、年を重ねるにつれ有難く思っている。

思えば、十二期生は、良きにつけ、悪しきにつけ、まとまりが強かつたなとつくづく思う。中学最後の、柔剣道全県大会へ出発の日、折り悪しく我が校は、東雲原飛行場の勤労奉仕と重なり、恒例の駅前での激励会中止となつたが、能工、能商は選手を囲み氣勢を上げ始めた。さすがに私達は言葉も少なく彼らを横に見ながら構内に。その時「ワッシヨイワッシヨイ」の掛け声と共に、同期の仲間が東雲原から駆けつけてくれた。聞けば、軍の監督の許可を得てわっぱか仕事を終えて来たと言ふ。駅前中央に陣取つての激励会が始まつた。戦わん哉時来る!! 能中の蜚声に胸が熱くなる。肩を叩かれ、又叩くあの感動は、卒業して六十四年の今も心に焼きついて、すでに故人になった朋友をも一層なつかしく思う。

「お前達は随分ゴンタ揃いだつたが、可愛い奴らだ。」戦後、今は亡き恩師野呂先生に

しみじみそんな言葉を頂いた事があつた。嬉しかった。それは、この言葉が私達の能中時代のすべてを表しているからだ。 合掌

本線下り汽車通生

二十期(新制二期)

豊澤 幸夫

昭和十九年の春。我ら二ツ井小六年生は憧れの「能中」に入るべく、受験勉強をしていた。大臣の名前や東京からシンガポールまでの距離を暗記するのが主である。ところが、二月のある朝、校舎が炎上した。校舎のない県立中学校を受験、全員合格となつた。

我らは汽車通。朝は飯を嚼みかみ駅に駆け込む。ゲートルを巻いて登校するのだが、すぐ降り落ちて、巻き方に苦労した。学校によって乗る車両が決められている。下級生には座席はない。時には郵便車のこともあった。東能代まで、応援歌を歌わされる。五能線に乗り換えると、本線上り下りの応援歌競演となる。五年生は悠然と本を広げ騒音から超然としている。期末試験の日程が発表になると車中は一転、勉強集中空間となる。さすが、「能中」であつた。能代駅から仮校舎に着く迄、上級生に会うたびに拳手の敬礼、学校に着く

と体育館に直行、入り口付近が一年生集団の溜まり場。一校時が始まるまで、「上級生に對して敬礼」の連続であった。

二年の夏休み、暑い真昼、玉音放送があつて敗戦を知った。

民主主義になつて、教科書に墨を塗った。実生活は益々粗悪になつた。

朝夕の汽車は混雑を極め、窓から乗り降り当たり前となつた。機関車後部の石炭車の上に伏せてトンネルでは息を止めたこともある。冬、帰りの五能線はよく運休した。能代駅から東能代駅までの線路の上を、他校の男女生徒と列をなして歩いた。淡い青春の束の間でもあつた。

学制が変わり「能中四年」から「能南高二年」になり、樽子山の新校舎に入った。

最終六年目は、本線通学生だけでクラスをつくり、ホームルームとして音楽室に居を構え、教科によつて教室を移動した。授業が終わると、土手をよじ登つて、駅までの最短距離を駆けた。山崎富之助先生の「たまには掃除してくれ」と仰つた声が耳に残る。

樽子山に築く師弟の輪

二十二期(新制四期)

佐藤 進

「お客さんタバコの火をかして下さい。」汽車通の仲間が向かいに座っている人から自分のタバコに火をつけてもらいスパスパ吸っていた。学校について朝礼の時「私が今日からのクラスの担任となつたのでよろしく」と自己紹介した先生の顔を見たとき彼曰く「ワア！今朝汽車の中でタバコの火かりだんだ」と。その日転勤してきた新任の先生だったのだ。こんな話題にはこと欠かない昭和二十一年終戦の翌年の入学組旧制能代中学最後の同期の桜である。併設中学と言う名のもと高校生活を通じて六年間同じ釜の飯を食つた仲間である。入学時樽子山の校舎焼失のため渾一小跡(現在の中央公民館位置)のボロ仮校舎生活であつたがなんとと言っても黄線の入つた学帽をかぶつての登校はカッコよかった。これで俺も能中の一員になつたのだなと感激したのを今でもハッキリ思い出すことが出来る。とにかく個性豊かな先生達に教えられた。紙面の都合上一部の先生達を偲んでみよう。『ナフタリン』こと国語の鎌田宏先生はいち早く新聞部を創設し「校友時報」で「失敗してもいいからやり始めた事は最後までやり通

せ」とトコトン討論させた。生物班はヤマイモの「ヤマチャ」こと小山善一先生。三年の時の担任でもあつたので自宅にも伺うこともあつたのですが玄関は下駄箱は勿論のことそこいら中稲のモミガラ栽培の実験のフラスコが置いてあつていつも勝手口から伺つた。授業の合い間にサツカリンの合成実験をしてくれ生徒を大喜びさせた物理の高橋直三先生。独特の秋田弁的発音と会話でなぜかいつも素足にゾウリ姿で授業をしていた「ドンキ」と英語の宮腰斌一先生。きわめつきは東大出の同じ英語で頭の形が男性のシンボルそっくりなことからニックネームがそのもずばり「ガモ」こと佐々木正之先生。古稀を過ぎた今でも各々の想い出を出し合つてそれをつなぎ合わせた懐かしの舞台では誰もがみんな主役なのです。

憶い出のことなど

定時制二期

若林 秀 稔

「時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ…」昭和二十年八月大阪は八尾。少年飛行兵だった私の耳には、意味のよく解らない放送だが、ここだけが印象的だった。言わず

と終戦の詔勅の一部。十代半ば過ぎだった。それから三年、戦後の不安は続いていた。

働き乍らでも……と向学の傍輩は多かった。全日制と同じ単位を四年間でとることに挑戦、教室は遅れると席がなくなるくらい生徒の数が多かった。男ばかりの学び舎に連合生徒会（各分校が中心校に集まって文化祭や競技会などやった）の時は女生徒が参加、張り切ってやったことが懐かしい。当時の写真を見た。みんな若い（当り前だ）髪がフサフサしてる。昭和二十年に、東京大空襲で逝ったオヤジの頭は大分光ってた。二十七年定時制卒業の頃だったか兄から血筋だからと効果の高い養毛剤を進められて、爾来、まことに真面目に使い続けている。いつ頃からか、地肌は隠れないし、隙間が増えてきた。一向に気配（毛生え）はなかった。今は？もう云いたくない。タイムスリップしよう。

平成五年正月、有志による同窓への呼び掛けで、卒業以来初めて、実に四十年ぶりの定時制同窓の集いを開くことが出来た。恩師を入れて六十人近く集まり、往時の話題に散るを忘れた花のよう。中心校や分校毎の集まりはあったが、全体での集いはなかったので将に感激の日だった。当時のコピーがかすれて判読し難いが、中心校の柳谷・市川・北嶋の各先生、分校の北林・伊藤・稲垣・関・田村の先生方の名前がやっと読みとれる。故人

となられた諸先生の顔が思い浮かぶ。集いは盛り上がり二回目もやろうと再会を約す。そして平成九年、第二回目の集い。前回来られなかった先生方も参加、以前よりキレイになった女性達が多数出席してくれたので、よりまして賑わった。

創立八十周年の中で同窓会名簿に第十四期（昭和三十九年）で定時制が終わっているのを見る時、些か寂寞たるものを覚えるが、商店や工場に勤める人、小学校の先生、検察庁、警察、裁判所、国鉄職員などなど、雑多な集まりであつたが、働き乍ら学ぶことに真摯な姿、今素直に満足している。

同期生の絆

二十八期（新制十期）

牧野正弘

「まだあげ初めし前髪の、林檎のもとにみえしとき、前にさしたる花櫛の、花ある君と思ひけり……」藤村詩抄に憧れた少年時代、私は昭和三十年四月から三十三年三月まで、新制十期生として能代高校に学んだ。浜口村（現八竜町）釜谷から樽子山間往復九里（約三十六km）の登坂の多い、砂ぼこりと砂利道を汗だくで自転車通学した日々が懐かしい。この

時期、昭和三十一年三月の畠町中央から出火した第二次能代大火を目の当たりに見たときの光景は今でも脳裏にこびりついている。また、三十一年には、全県高校体操大会には男子能代高校が優勝し、メルボルンオリンピックでは小野喬選手が鉄棒に優勝した時でもある。

顧みれば、卒業以来四十六年の歳月が流れ歴史の脈々と息づく我が母校も創立八十周年の年輪を刻んだことになる。年輪の一年一年には、それぞれの歴史や思い出がぎっしり刻まれている。それを回顧するときは、感無量に浸るひとときでもある。

昭和三十年九月、本校創立三十周年記念前夜祭には三年生の先輩女子から私がドレスを、今は亡きF君がモーニングを着付けしてもらい、すっかりウエディング気分（？）で、全校あげて市内に繰り出した大仮装行列に参加し、パフォーマンスしたときの光景は忘れない。そして、文化活動として三年間文芸部に所属し、第二、第三学年にて文芸部部长を務め、毎号六十頁強の「松陵」を発行するときの原稿集めや印刷代稼ぎのための広告とり、編集、校正など、苦しくも、しかし、完成し読者に関心をもってもらったときは得難い喜びと充実感に浸ったものである。松陵二十七号の発行をもって新制十期卒業生となった。

やがて、市内のとある道端で一人の同期生

K君との出会いを契機に、昭和四十五年一月に初の同期会が開かれた。以来、有志が集い「さんみ会」（三十三年卒の意）を結成、月例で開催して今も続いている。これぞ、母校能代高校に学んだ者たちの「同期生の絆」である！

十里強歩への参加

三十期新制十二期

畠山良子

昭和三十二年四月、今から四十七年前一年生の入学女子生徒は七名であった。一年C組にまとまって所属した。

恒例の十里強歩が近付くと心が騒いだのだろうと思われるが、前日私たち女子も参加したいと職員室に行った。私たち以前は参加していなかったようであった。今にして思えば女子を参加させるべきか否か職員会議ものだったと思う。結果として『参加してよし。』ということだった。

当日、午後九時に学校集合、その後体育館にて出発セレモニー、十二時裏門から出発となった。出発の合図があると、男子生徒はオースという雄叫びを上げ、ドドドーとなだれ込むようにして走って行った。女子部隊（七

名全員参加だったか忘却のかなたで定かではない）は、一Cの副担任が引率してくれた。

コースは裏門（現在の文化会館若松町出入口）→栄町→出戸沼→浅内→八竜→森岳→金岡→松山→東能代→中和通り（樽子山）→正門の全行程であった。浅内を過ぎるまでは調子よく歩けたと思う。八竜の関門の灯が暗闇の中にぼんやり見え、地域PTAの方々の差し入れのぶどうを二、三粒いただいたことを覚えていて。八竜を過ぎ森岳に向かう頃、東の空を照らす月がとてもきれいで、大集団の後尾を進むうち歌も出たりした。

夜もしらじらと明け、東能代周辺を歩いていると、一番の下り列車に、二ツ井方面の男子生徒が、もう帰宅のため乗っていて、私たちに手を振っていた。この頃になると脚は棒のようで、足には豆ができ、歩いている感覚はなく、口もきかず、人目にはさながらあわれな敗戦兵の如き姿に見えたと思う。学校に着いたのは七時過ぎであった。

今思っても夢のような、すごい事でした。突然の申し入れを受けとめ実現してくださった先生たちと、おおらかな時代に感謝しています。いい高校時代でした。

思い出は三年A組

三十二期新制十四期

成田繁穂

A組は同期五クラスの内、主に卒業後即就職を希望する者の集まりでした。私のように学業成績不良、今で云えば落ちこぼ的な者も入っていましたので「どうでもA組」などとも云われておりましたが中味は至って濃く、就職率は100%に近かったような気がします。担任はダイショウこと大山昇市郎先生、仲間総勢五十四名でした。授業は就職実用系でしたから読み書き算盤に簿記もありました。特に算盤は商業勘定の基ということで、担当のタケジユウこと武田重蔵先生も相当の気合いが入っておりまして。不肖の私は下手の代表格で先生が独特の節回しでやる読み上げ算も加減三桁あたりが限界、その不器用さに呆れ果てられたものであります。しかしそんな私が後年日本が誇る世界の技術「ヒヨコの鑑別」社団法人全日本初生雛鑑別協会所属海外派遣鑑別師という少々長めの肩書きを持つてヨーロッパへ出稼ぎに行くことになるわけですから不器用も器用のウチとは昔の人もなかなかいいことを云ったものだと思います。武田先生が生前現在の私の店に来られ、酔いが回ると「おい成田、世のながおもしろなあー、オ

寒い朝に熱き心

三十五期(新制十七期)

川添能夫

メミだいな算盤の下手くそなのが海外へ稼ぎに行ったり商売やったりしてるんだがら」と呵呵大笑されたのも今はいい思い出になってしまいました。長い目でみていただいた恩師誠に有難しであります。いい友だちにもめぐり会いました。隣の席にいた堀内とは特にウマが合つてよく映画の話をしました。彼は岩崎村からの五能線通学でしたのでなかなか映画を見る時間がとれず、私は八竜浜田地区からの自転車通学でしたので陸上の部活が終わってから気楽に映画を見て帰ることが出来ました。いつも私が語り部となり、裕次郎や小林旭に会つて来たとか、中劇でゲーリー・クーパーやジョン・ウェインを見たとか今にして思えば他愛のないことばかりの話でした。その後自分は洋画にかぶれてしまい、ついには海外へ行つてみたいと夢を見たり希望を持つようになつて行きます。堀内は一念発起して大学に行き算盤勘定の上手も生かして現在は山口県で会計事務所を経営、それぞれの人生を歩みつつ現在に至る、というわけで卒業から四十三年、思い出玉手箱の中味は尽きることがありません。今後百周年の時に開けたらどんな思い出が出てくるか又楽しみなところです。校歌にある「若き命を讀えつつを口づさみながら健康で長生きをつづけたい」と思う近頃であります。

下から吹き上げる雪に抗して樽子山に登校。「寒い朝も心ひとつで暖かくなる。」サユリストの健児達の負けじ魂は、後の人生に続く。

長兄は旧制能中で英語は丸暗記、次兄は新制切換時代のぼろのクラブで甲子園を目指す。そんな酒飲み話に心ふくらませ昭和三十七に入学。

いささかませた向能代や越境の素朴な岩崎など新しい交友を広げ、文学部では、とてつもなく恥ずかしがりの先輩や大人風の物腰の先輩にやたらと感激。授業も目新しく「小諸なる古城のほとり…」の音律に胸はずみ、春風に誘われては、能代公園・中川原まで彷徨し、有志と同人誌の発刊へ。恋に恋しての独白は、まさに赤面の酩酊作文であった。

倫理の読本は、プラトン始め先哲の集合。生かじりでも心踊り、図書館に通つて文学・哲学もどきを涉獵。始めの知的楽しさは、まじめさがたたり、次第に悩める青年へ。今考えると文武両道でのバランスが大事であった。

一昔前の「三太郎の日記」「愛と認識との出発」、戦没学徒の「きけわだつみの声」、徹

夜で読んだ「人間の条件」、安保の「最後の微笑」、社会思想に目を開いた「チボー家の人々」、今でも印象深い一節一節が心に浮かぶ。観念的な話題を休憩時間の日だまりでダベリングしたものもなつかしい。

戦争をくぐつて来たユニークな先生達は多くのことを教えてくれた。白鳥先生は、授業前に黒板に一礼し共に真理を学ぼうとの姿勢を示し、中央から講師も招き、世界につながる風を吹きこんだ。体操部をトップレベルにした中村先生の風貌も慕しく、ポイントをついた大高先生の数学指導には、多くの受験生が救われた。

良き競争関係の中で同期の面々は、勉学に実績を残し、甲子園への出場も果たした。卒業後四十年、時たま会う連中は、人なつこく、実業、教育等諸分野でしぶとくがんばっている。

能代は、北前船の寄港地であり、元々外に開けた文化度の高い町であり、能代高はまさにその基点でもあった。その歴史を生かし、厳しい風土で培った魂で、能代なまりの後輩諸氏が世界各地でおいに活躍することを期待している。又、小生も知的好奇心を失わず、心組みは生涯青年学徒であり続ける決意である。

平穩の日々

三十八期(新制二十期)

佐藤能雅

入学した一九六五年(昭和四十年)は、格段に記憶に残る社会的な事柄は少なく、前年の東海道新幹線の開業や夏季オリンピックの東京開催などに象徴される高度経済成長期にありました。

能代駅から五能線で二つ目の駅から列車で私は通学していました。朝の通学時間帯には蒸気機関車に牽引された長編成の列車が運行され、混雑していた車内では、遠くからの通学生がボックス席で勉強している姿が見受けられました。朝早めに学校に着くダイヤ編成であつたので、多少の予習と復習の時間がありました。校舎は、駅から中和通りを通って少し登る追分樽子山の丘にあり、新しい図書館のほかに古い木造で、木々や芝生が校舎に馴染んだ落ち着いた雰囲気全体がありました。窓には能代中学と記された磨りの入ったガラスがまだ残っていました。

授業の様子などを思い起こすと、名物先生も多く、授業は熱意に溢れ、生徒の習得のために懇切に指導されていました。一―二行の現代文の解説で一時限を費やされる話術の先生もありました。体育の時間に野球を課し、

負けた側にグラウンド周回を課す先生もおられ、負けず嫌いな気風を育んでくれました。当時の能高生の気概は自由闊達で、自立心に富んでいたように思えます。大学と大学院で学生を指導している私の見方では、最近の大学生よりは当時の能高生の気概のほうが高かったと思えます。高校とくに普通高校へ進学する者は多数ではなく、大学への進学率も地域的には高くなかったことも私たちの自意識の背後にあつたのでしょうか。私は、勉学にあまり熱心なほうではありませんでしたが、能高祭や十里強歩などの行事には積極的に参加していました。十里強歩に向けては、一人あるいは友人と夜にトレーニングをし、それなりの競技成績でした。真夜中の行事にもかかわらず、果物、食事や飲み物がコース沿道の方々から盛大に提供され、声援も大きく、高校、能高生と沿道地域と緊密に関わっていました。高校時代は平穩な日々であつたと今は思われ、そのなかで個性が豊かで多彩な友人、諸兄などに出会い、その後も交流は続きました。大学に入学した年(一九六八年)には、大学は閉鎖状態となり、そして、世界的な規模で、社会体制の検証と創造が求められ、加速度的に変遷する時代に私たちは入って行きました。

一九七〇年、万博の旅

四十二期(新制二十四期)

山下明則

十月の末、母校の二年生である娘が、京都から十六時間をかけたバスの長旅で修学旅行から帰ってきました。新潟中越地震により、帰路予定していた寝台特急が運休になったためです。さすがにぐったり疲れておりましたが、思いかげないこの体験は忘れられない思い出の一コマになると思います。

私の高校時代で思い出深いのはやはり修学旅行です。いつもなら古都の名所・旧跡を訪ねるのが定番だったのですが、一九七〇年だったのが幸いし、大阪万博会場がメインになったからです。

九月に、椅子席だけの臨時夜行列車で、半日以上かけ現地に着きました。関西の厳しい残暑と会場の広さと人込みに圧倒されました。会場内は各自自由行動だったので、長蛇の列ができる人気のパビリオンを避けて数カ国を廻り、友人と二人で昼食時間のピーク過ぎを狙ってフランス館に併設されたレストランに向かいました。実は二ヶ月前、父がやはり万博見学に出かけており、ソ連館のレストランで食べたロシア料理の味を自慢げに話していたのを聞き、この旅行は施設見学より、その

国の自慢料理を味わえる貴重な体験ができる
と楽しみに計画していたからです。

少々の待ち時間の後、座席に案内されました。ランチとはいえ初めてのフルコース、料理が出てくるまで頭の中で作法のシミュレーションをしながら緊張していました。スープから始まったコースは、まずの魚料理、肉料理と続き、ナイフ・フォークも何とか使いこなせました。初めて食べたフランスパンのおいしさにも大感激しました。結局、二時間しかけた優雅な昼食が万博見学のすべてとなり、修学旅行の大切な思い出となりました。

人種のもつば

四十三期(新制二十五期)

小林 明子

最近 UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) の卒業式を垣間見る機会があった。この伝統あるマンモス大学では、学部ごとに分かれて卒業式が行われ、工学部では修士、博士それぞれの課程からの卒業生約千人が一堂に集まっていた。角帽と黒のガウンをまとった一人一人が名前を呼ばれ、誇らしげに壇上にあがり、卒業証書を受け取っている。その顔ぶれのなんと九十%は東洋系であ

る。アメリカで生まれた中国系二世、三世や東南アジア諸国からの学生に加え、中国本土からの留学生が圧倒的に多く、その数は非常に高率にのぼると聞く。祖国を離れ高度の教育を終えたこの若者たちが、これから世界経済を動かし、技術開発を進めていくのだ。ふと、能代の若者にもこの卒業式のダイナミクスを見せてあげたいと思った。

一九七九年夏、財もなく閑もなく若さだけで私は成田からシカゴへ飛び立った。イリノイ大学大学院で物理学の研究を続けるための留学だったが、アメリカを見たかったというのが本音である。このころ物理系院生の数は約六十人、そのうち外国人留学生はほんの五、六人にすぎなかった。その後、留学生数は激増し、現在ではアメリカの大学や企業はどれも「人種のもつば」の様を呈する。

一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて、テキサス州ダラス市にあるルーセント・テクノロジーズのベル研究所に勤務していた際にも、人材多様性は会社側の重要課題の一つであり、その社内教育は徹底されていた。人種差別問題などが起されば会社にとって大打撃となる。しかし実際の話、ビジネスの世界では人種がどうの国籍がどうのなどと言っている暇は無い。中国人の同僚とプロジェクトを進め、ドイツの顧客会社と提携を組み、マレーシアの部品納入者に対応する、という

ようなことが当時からすでに当たり前になっていた。

私は現在南カリフォルニアに在住しており、州知事に就任したシュワルツネッガー氏の動向が非常に興味深い。強いオーストラリア訛りの英語で言いたいことを言い、絶大な人気を誇る氏が、将来の大統領選出馬を狙っていることは周知の事実である。現在の法律では、アメリカで生まれた者だけが大統領になる資格を持つが、その法律を変えようと真剣に議論が交わされるようになった。

寒風吹きすさぶ能代からも、この「人種のもつば」に飛び込んで、東北訛りの英語を話しつつ国際社会を揺るがすような、そんな大物が現れてくれるだろうか？

能代高校の女はモテない……？

五十期(新制三十二期)

碓井 則子

能代に帰省するたびにいつも集まるメンバーがいる。皆、能代高校のメンバーである。警察署勤務の Y 君、小学校から同じクラスの M 君、そして高三の同じクラスの K 君。

現在神奈川に居を構えている私は、なかなか頻繁に帰省できないものの、帰れば必ず連

絡を取り合い学生生活を懐かしみながら飲める仲間である。

一年に一回しか顔を合わさない面々でも会えばすんなりお互い精神年齢までもが昔へとタイムスリップできるような心地である。

そういえば随分と楽しく過ごした三年だった記憶はあるが、ただ一つ、私には『彼氏』と呼べる人物が存在しなかったことだ。ただ皆とワイワイ賑やかに送っただけ……？

当時、能代高校は自宅から六キロも離れていて田んぼのど真ん中……自転車通学だった私は三十分以上もかかる道のりを、強風にあおられながら左手はスカートを押さえ右手でハンドルを握り、ペダルを踏んばってこいだ……なんとまあ色気の無い学生だった。

各クラス五十人中女子生徒は五人ずつ。女生徒は一割程度。祖母はよく「女の子は女子高に行くもんだけどねえ……」などと言っていたけど、いえいえ十分と充実した学生生活であった。

かくいうこの三人の仲間……二人はなかなかもてていたようで女子高に彼女がいたらしい。最近知った事だが、彼女を作るように見えなかったY君までが女子高にちゃんと確保していた！というのだ。ガーン！いいんだ、どうせ、能代高校の女は、女性扱いされないから所詮もてないんだあ！などと酔った私は息巻く。「そうかそうか……」と慰めにも

似たお言葉……。

卒業して二十五年、私の娘も高二である。早いものだ。去年から、三年間同級生だった数少ない女生徒のS美も加わり、飲み会もしは華やかに？なった。私とS美を三年間見放さずに見守ってくれた担任のゴツちゃん（久保田先生）……お元氣かなあ。

能代高校の仲間は、ずっと私の宝物である。

今も輝いて

五十八期（新制四十期）

佐々木 法子

卒業して十五年も経つというのに、高校時代の自分は記憶の窓をあけるとすぐそこにいる。毎日、今日は何をして楽しんでやろうかとワクワクしていた。高校は広い地域から生徒が集まってくるので、顔ぶれも新鮮。こんな楽しい人がいたのか、こんなすごい人がいたのか……そんな新しい友だちとの出会いだけでも十分刺激的だった。能代高校は進学校だったけれど、当時は部活動もかなり盛んで、校訓の通り文武両道を貫く人が多かった。女子のクラブは少なかったもので、素敵な先輩がいる！というミーハーな動機で陸上競技部の

マネージャーに。○一秒や数cmを競うシビアな世界で戦う部員たちから多くのことを学んだし、全県総合優勝、東北大会、インターハイ出場などたくさん感動を分けてもらった。まったく知らなかった陸上競技の世界を垣間見られて自分の視野が広がったし、夜遅くまで部活動をしている選手たちが、勉強でも好成绩をとったりしていい刺激になったものだ。

思い起こせば、高校時代はどんなことにも熱くなっていた。文化祭、球技大会、十里強歩、修学旅行……すべてのイベントにとことんこだわって、みんな一丸となって楽しんでいた。だからこそ高校時代の思い出は濃く、鮮明なのかもしれない。大学進学で上京して、また日本各地から集まる友人が増えた。社会人になって知り合いは増えた。アメリカの地にやってきて、肌の色が違う友だちもできた。でも一番会いたいと思うのは常に高校時代の友人たちで、元気の源をくれるのも、いつだって彼等だ。

田んぼのまん中であって遠くからでも見渡せた校舎は、今はショッピングセンターに囲まれて見ることはできない。でもいつも私の心の真ん中にあって輝いている。制服がかわってしまった今の生徒たちもいつか、熱く母校を思い出すような高校時代を送ってほしい。

変わり者の私

六十期(新制四十二期)

中 嶋 巨 加

私の高校時代の三年間は、ほぼ部活動中心に過ごしていた。今でこそ、能高の女子生徒が増え、各運動部で素晴らしい成績を残しているようだが、当時、私の学年の女生徒は九十八名で、学年の三分の一程度であった。その中で運動部の選手として活動していたのは、私を含めわずか八人である。放課後や休日のほとんどを部活に割いていた私から見ると、運動部以外の女子生徒はどんな高校生活を送っていたのだろうか。今振り返ってみると、男性中心の能高運動部の中で、部活に励む私は、変わり者だったのかもしれない。

入学当初、マネージャー希望で剣道部の門を叩いたのだが、顧問の勧めにいつの間にか男子生徒の中に混じり、練習に明け暮れる毎日となった。私より体が大きく力強い男子と共に言う練習は「辛い」の一言である。泣きながら、死に物狂いで相手に立ち向かったり、休みたいが為に言い訳をどうしようかと考えたこともあった。

勉強にもついていくのに必死だった。くたくたになった体で、翌日の予習や宿題の為に机に向かうものの、すぐに睡魔に襲われ、そ

のまま朝を迎えることも多かった。朝も起きるのが辛く、母親に叩き起こされ、物凄いスピードで自転車を三十分漕ぎ、息を切らしながら登校したことも懐かしい。

途中、怪我に泣き、最後は良い成績を残せなかったが、二年の県北新人大会で個人優勝出来たことが私の一番の思い出である。

部活動の辛い日々も、継続出来たからこそ良い思い出として語ることが許される。継続出来たのは、負けず嫌いな性格であったこと、家族の支えがあったこと、仲間恵まれたからに違いない。当時の仲間とは男女関係なく、今でも連絡を取り合える仲だ。十年以上たった今、辛い思い出を語りながら過ごす時間は心から楽しいものである。これは、続けた者だけが得られるご褒美だと思う。私は変わり者ではなく、幸せ者なのかもしれない。

思い出の十里強歩

六十二期(新制四十四期)

小 玉 千 春

〆田んぼの中の学校〆も時代の変遷とともに、その景色もだいぶ様変わりしました。コンビニもあちこちにできて便利いい場所になったものです。

六十五分授業導入の年に入学し、かなり進学校を意識させられたものだったが、所詮あの程度の成績で卒業したのであれば、部活等の課外授業にもっと心血を注げば良かったなあというのが本音です。それでも、多感な時期をこの学び舎で過ごし、楽しいこと苦しいこといろんなことを味わいました。中でも〆十里強歩〆は強烈な思い出です。夜中に二十キロもの距離(女子)を走り(歩く)なんてことはもうありえないでしょう。午前二時前に到着する男子は予想より少なく、奇抜な格好の人口も減つてのスタートは少し寂しく感じられました。「始まってしまった。」スタートの号砲にもう逃げられないという思いで走り出しました。一緒に走っていた友達は中程を過ぎる頃には散り散りになり、街灯も少ない道は不安で、ゼッケンをつけた背中や関門の明かりを見つけると心救われた思いでした。気力も体力も限界の最後の関門では、薄明かりにお城が見えいよいよ幻覚も見えたかと思いきや、梨を食べ正気に返ると瓦屋根の立派な家でした。後にそれが同級生の家だと知り違う驚きもありましたが…。「学校が見えてからが長い」という先輩達の言葉をよそに、気付くともう校門らしきものが見え、反対側から通学する私は幸いにそれが校舎だとは分からなかったのです。あつという間の結末に気抜けはしたものの、体はくたくたで、翌

日の代休での原付免許取得は体がままならず大変な思いをしました。

特段、大会のために真面目な取り組みをしたわけではありませんが、苦しさから逃げ出すことなく完走できたということが、過酷な思い出を輝かしい思い出と変えてくれました。夜中に行われるこの行事がこれからも続いてくれることを切に願います。

創立八十周年にあたって

六十七期(新制四十九期)

後藤弘志

草稿に先立ちまして、我が母校、能代高等学校が八十周年を迎えられましたことを、心よりお喜び申し上げます。

私が在籍しておりました時分には、運よく七十周年を迎えることができましたが、それから十年の歳月が経過していたことを振り返りますと、誠に月並みではございますが「少年老い易く学成り難し」の言葉を、今まさに身にしみて感じております。

在籍中の主な出来事を挙げますと、六千人余りの尊い人命を奪った阪神淡路大震災、未だに審判が続いている地下鉄サリン事件などが挙げられます。経済面につきましても、日

本の歪んだ産業構造が顕在化してきた、いわゆる「失われた九十年代」の先駆けの頃かと思われれます。

社会的な時事は今改めて思い返しますと明るい話題が乏しかったように感じておりますが、能代高校での学園生活は、私自身の人格形成において大いなる糧となりました。

その一つが、「愛校心」であります。能高祭の後夜祭にて時を忘れてフォークダンスを踊り続けたことは、十年を経た現在でも私のかけがえのない思い出です。そうした思い出が、母校を愛する心を育み、そして現在の郷土秋田を愛する原動力になっているのではないかと思います。

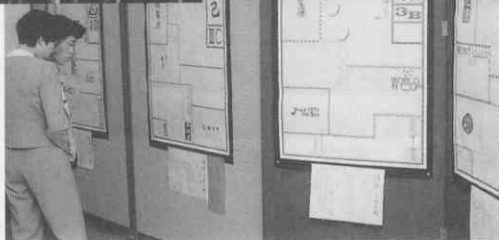
話は変わりますが、いままさに学園生活を



創立70周年記念式典 (平成7年度)



授業風景 (平成9年度)



能高祭 (平成8年度)

送っている皆様におかれましては、大変な苦勞をなさっているかと思われれますが、努力は必ず報われます。苦勞は積極的に買っていただきたいと思えます。それは単に偏差値を上げることでは、決してありません。学生の頃の苦勞が、後の人間形成において非常に重要になってくることは私自身、まだまだ若輩者ではございますが、社会に出て痛感している次第です。

最後になりましたが、母校・能代高校の益々のご発展を心から祈念いたします。



壮行会（平成10年度）

乾杯して思い出を語る

七十期（新制五十二期）

下坂 範明

高校の時から友人と酒を飲みながら思い出話をする。あの頃お前はこんな奴だったのだ、オレはあの時こんなことをやったのだ、他愛もない話ばかりだ。そして、はたと気付く、ああもう五年も経っているのか、と。卒業からもう五年もの月日が経過した。五年という月日は長い。ハイハイしていた赤ん坊も五年経てば、走りまわって憎たらしいことを言う。あの頃はという口ぶりになる。

あの頃、私は恋をしていた。一つのこと、熱中するとバカがつくくらいまっすぐになっ
てしまう私にとって恋をするというのはバカ
みたいにその人だけを一途に好きになっ
てしまうことを意味する。それは高校三年の秋の
話であり、私の高校生活唯一の恋であった。
私はその人を好きになったとはいいが、全く恋
のノウハウというものがわからない人間であ
った（ある）。同じころによく話すようにな
った女の子の友達がいた。私はその友人に助
けを求めた。友人に助けを借りながら私はそ
の娘にちよつとずつ近付いていった。大い
な手助けを借りながら、私はその人と二人だ
けでも普通に話ができるようになった。その
状態になるまで、好きになってから四カ月、
出会ってからだと一年と九カ月かかった計算
になる。気の長い恋愛である。そんな気の長
い恋愛に付き合うほど皆は暇でなく、その子
はその四カ月の間に恋人ができ、私の高校唯
一の恋愛はおそろしくあっさりと幕を閉じた。
それから四年後、その幕は再びあがる。飲
み会の席。その子との再会。少女の面影を残
しながら大人への階段を上っている彼女。ふ
つとつとわき返る昔の恋心。一カ月間、何度
かのデートを経て意を決して私は告白した。
そして――。

あっさりとフラれ幕引き。人生ドラマチツ
クなことはそう簡単には起こらない。ドラマ

よりも楽しいが。

高校時代はこんなにも忘れ得ぬものかと私
は思った。酒を飲みながら高校の頃からの友
人にこの失恋の話をした。バカにされながら
肩をたたかれた。そうやって元気をもらう。
高校時代の友人はこんなにもかげがえのない
ものかと痛感した。そして、乾杯とともに再
会を誓う。



能高祭風景（平成11年度）

生徒会長就任の経験から

七十一期（新制五十三期）

山谷 俊平

二〇〇一年三月に秋田県立能代高等学校を

卒業してから、早くも四年の歳月が過ぎようとしています。能代高校での三年間は非常に思い出深いものであり、かけがえの無い財産として私の中に生き続けています。その中でも一番印象に残っているのが、生徒会長として行動した一年間です。友人に誘われて立候補したのですが、私のその軽率な使命感にはおかまいなしで「生徒会長なのだから」というプレッシャーが、絶えず私にまとわりつくようになりました。同級生の目、保護者の目、下級生の目、先生方の目などが、様々な場面で私に向けられました。

そういう状況の中で、私が気づくことができたのは、「自律」ということでした。人に見られるということはプレッシャーですが、自分の振る舞いはいくつかと自分を律するいい機会であり、さらには自分を他人に売り込む大きなチャンスでもあるといえます。何百人という人の前に立ったことすらない私にとって、生徒会長の職務は日々緊張の連続でしたが、自分を律するということが、積極的に前に出て自分をアピールするということの、とてもいいトレーニングになったと今では思っています。現在私は秋田大学に在学しながら、「ベル・ヴィエントス」という南米民族音楽グループに所属していますが、どのような場所でも臆せず演奏できるのは、その経験が生きているからなのではと思っています。ちな

みに能代文化会館でも演奏しました。

今、能代は実に多様な問題に直面しています。名称問題を含む能代山本七市町村の合併問題や、市内の学校の再編、未だ予断を許さない景気など、一筋縄ではいかない課題が山積んでいます。私を含む未熟な若い世代は、これをただ黙って見守るべきなのでしょうか。私は決してそんなことは無いと思います。若いからこそ、自分が住んでいく町の将来を考えるべきだと思います。そのためには自ら町の課題を見つめ、自分の考えを持ち、それを多くの人に広めていくことが必要不可欠です。能代に就職が決まった私も例外ではなく、このことを十分にふまえ、社会人として活動していきたいと思っています。その過程で、能代高校で培ったものがきつと生かされていくだろうと信じてやみません。



生徒総会（平成12年度）

同じ三年間だけど

七十二期（新制五十四期）

袴田金生

この度、創立八十周年をめでたく迎えられましたことを心から喜び、お祝いを申し上げます。本当におめでとうございます。

高校での三年間というものは本当に大きな意味を持つものだなと、今改めて感じています。自由というものに責任が伴い始める時期であり、多くの人にとって人生における第一の岐路であり、視野と器量をゆつくりと養える時期でもありました。現在、日々前を向き躍進できているのは、あの時間に学び得た基本的なことが土台となっているためなのだ実感しています。

先日同級会に赴いた際、見慣れた顔は新鮮に、また先生方の背中では小さく感じられました。私はそれらにどこか懐かしさと寂しさを覚えました。自分の成長を感じ取った機会でもありました。

答辞の際に述べた、「時の流れは、本当に必要な価値のあるものを残してくれるような気がする。いつか高校生活を振り返ったとき、にじみ出てくるものがあると思う。」という言葉。自分自身でも感じ取れる程時が流れた今、にじみ出てくるものといえは、人との繋



仲間たち（平成13年度）

がり」のように感じます。勉強や遊びを共にした友達、あるいは同じ目的を持ち励みあった部活動の後輩、どこか奥底では分かり合っていた同輩、学ぶ手本であり人生の相談相手でもあった先輩そして先生方。今尚様々な局面においての心の支えであり、導きであります。今だからこそ、様々な繋がりに本当に感謝の気持ちを伝えられる気がします。

高校を出て三年。高校生活と同じだけの時間を過ごしたはずなのに、感じ得たものは一つも同じでなく、一層深いものだったような気がします。わずかながら視野が広がったことを実感できるからこそ、これからも全ての思い出はあの時のまま、それを根底に据えて幾つになっても忘れずにいようと思います。

夢

七十三期 新制五十五期

渡邊隼人

能代高校創立八十周年おめでとうございます。僕が卒業したのは二年前ですが、父は四十年前に、兄は九年前に、卒業しております。それぞれに思い出は違うと思いますが、能代高校で学んだ事が土台となって、今日があるような気がします。

三年間の高校生活を思い出す時、豊かな自然の中で、さまざまな体験が、貴重で忘れたい日々であったと、能代を離れてしみじみと感じております。

僕は現在、大学で外国の文化や語学を学んでおりますが、毎日新しい発見であり、とても大変なのですが、充実して楽しく授業を受けております。特にサークル活動では、サンバを通して音楽やダンスなどで友好を深め、楽しい仲間と共に世界が広がる予感にとっても満足しております。

そして、七歳上の兄も、アメリカの大学院で環境とエネルギーの研究に頑張っています。

高校時代を思い出す時、父も兄も十里強歩が特に心に残っているようです。僕にとっても同じように、目標を持って走り出したけれど、とても苦しくて足が痛くなり、ゴールは

遠く、やつとの思いで完走できた時の喜びは、今も忘れられない事でした。

これからは、夢を叶える為の努力と、チャレンジ精神を持ち続け、誰かの役に立てるように、自分を磨いて頑張りたいと思います。



十里強歩（平成14年度）

The way we were

七十四期（新制五十六期）

吉岡和樹

母校である能代高校から卒業しもうすでに半年以上も経ったと思うと、やはり時間の流れの速さに驚かされる。同様に高校生活もあ

つという間であった。高校時代の自分はそんな三年間で何を得たのか？今の自分からふり返ってみた。

今でもよく会ったり、よく電話したり、メールしたり。それが高校時代にできた友人の今の形である。仲間のみんながそれぞれの夢に向かっていろんな所に旅立った。自分としては、三年間苦楽を共にしたかけがえのない人達と離れるのはとてもさみしいことだが、もっと大人になってそれぞれの道が出来てから、「久しぶり」ってまた会えたら、それ以上に素晴らしいことはないんじゃないかなと思う。そう思うことで、さらに自分のはげみになり、その未来に向かって進んでいくことが大切であると思える。

三年間、いろいろな面で、お世話ばかりかけてた先生方に報告である。自分も教師という職業をかなり視野に入れていることである。今思うと色々な先生方から、将来の指針たるものを受け取った気がする。それが自分の今のエネルギーとなっているのも間違いないと思う。今の自分は、本当に高校三年間が大切なものであって、自分の人生に大きな影響を与える期間であると確信している。だからこそ、将来、自分が(先)を(生)きている身として、十代の若者に、その人にとって(プラス)なものを少しでも多く与えてあげたいと思ったのである。



授業風景（平成15年度）

正直、戻れるものなら高校生に戻りたいと本当に思う。高校時代やり残したことがたくさんありすぎて数えきれない。在校生には、そんな思いはしてほしくないと思う。「今日という日は帰ってこない」日々この言葉をかみしめてほしい。君達が将来、最高だったと自分に自信が持てる高校生活にするために。

これから・・・

七十五期 新制五十七期

大谷 亮

この樽子山と高塙の地で八十年という歴史

を築きあげ、多くの先輩方が卒業し、社会という大きく厳しい世界へ送りだしてきた能代高校。自分は八十分の三年というほんの少しの歴史や伝統しか感じとることができませんでしたが、たったの八十年の三年でも、その一部で勉学に励むことができて、大変嬉しく思います。

この場所で悩み、考え、本来の自分を想像し、たくさんの人々を友と呼べるようになり、出会いと別れを繰り返してもなお未熟な自分が、務めようと必死に努力し、何百名もの生徒を率いていくのにふさわしい人間になりたいと常に願って生徒会に携わってきました。「よい学校」にしたいと思っても、具体的に何をどうしたらいいのかと考えました。僕が中学生の時、能代高校生のイメージは「一番大人な高校生」でした。しかしいざ能代高校生になってみると、決してそのイメージ通りではありませんでした。先生方はみな生徒を信頼し、期待を込めてさまざまなことを教えてくれます。その姿をみると、「頑張っただけに答えなければ…。裏切りたくはない…。できたら誉めてくれるかもしれない…。自分のためにもやんなきゃ…。」と思ってしまいます。きつと誰もがこう思っているのではないのでしょうか。（否定する人もいるとは思いますが、少しは思ったことがあるのではないのでしょうか。）高校生はもう大人だと一



校内体育大会（平成16年度）

先生がもっと話し合える機会をもうけてほしいと思っています。僕はあまりいい生徒会長ではありませんでした。でもこの意思だけは受け継いでもらいたいです。そして本当の「よりよい学校」をつくって下さい。

八十周年を迎えて

七十五期（新制五十七期）

戎屋友貴

創立八十周年おめでとうございます。

八十周年と聞いても、どれほど長いのかはじめは見当もつきませんでした。しかし、先日同窓生名簿を見る機会があり、そこで本当にたくさんさんの先輩方が学んでいたのだと知り、歴史を感じずにはいられませんでした。また、能代高校生の一人として、今まで受け継がれてきた伝統や、培われてきた能高らしさを自然と引き継ぎ、三年間を過ごせたことが、何だか誇らしく思えました。

それを強く感じたのが、三年時の能高祭でした。私にとって最後の学校祭は「超多忙」の一言に尽きます。クラスでの作品づくりに加え、所属していた演劇部の学校祭での公演の練習。さらに、学校祭の照明部門の手伝いも兼ねていたため、その準備と学校祭当日ま

での時期はとても忙しいものでした。一、二年生の時は、先輩たちにならって作業をしていましたが、三年生になり、自分が先頭に立って仕事をする立場となり、しなければならぬ仕事の多さに驚き、そこではじめて、今までの先輩たちの大変さと偉大さを実感しました。また、その中で、自分たちらしいオリジナルティを出すために、さまざまな工夫を凝らし、新しいものを取り入れながらも、今まで続けられてきたことを受け継いでいくことが大切なのだと感じました。

これは、今までの先輩方も、自分と同じように感じてきたことであり、また、後輩たちも感じるのだと思います。伝統を受け継ぎ



能高祭 芸能発表（平成16年度）

般的には言いますが、所詮は中学生の延長です。まだ立派な大人ではありません。正確には「大人になったがつっている子供」だと思います。褒めてもらいたいと心から願っています。先生方に、「生徒を信頼するな」と言っているのではなく、「もっと深く関わってほしい」のです。先生方に意見するのは大変失礼なことです。わかってほしいと思っています。だから「もっと生徒と先生が親しい学校」を目標にしてみました。生徒一人一人が能代高校生だという自覚をもつ、イコール、まだ子供だけど本当の意味で大人にならないければならない時期、そしてその見本を先生方に示してほしい、もっといろんなことを教えてほしい、話してほしい...と思っています。だから「これから」の生徒会長には、生徒と

ながらも、新たなものを生み出す。これがずっと繰り返され、歴史が刻まれていくと思うからです。

そう考えると、私が生まれるずっとずっと前の八十年前から今現在に至るまで、たくさん軌跡が一本でつながっているような気がします。そして、八十周年という区切りを経て、この先もつながっていくものだと思います。どんな風につながっていくかは、八十一年目からの後輩たちに期待します。

八十周年を迎えて

現生徒会長 中 嶋 瑞 樹

今年、我が能代高校は、創立八十周年という節目の年を迎えました。そしてこの伝統ある能代高校に現在在籍していることを大変光榮に思います。

時はとぎれることなく刻まれ、その中で私たちは、多くの人々と出会い、数えきれないほどの貴重な思い出を積み重ねてきました。友と汗だくになりながら最後まで取り組んだ能高祭。暗い夜道をただひたすらゴールを目指して走りぬいた十里強歩。教壇に立ち、教え導いてくださる先生方の話に真剣に耳を傾

け、自分の目標に向かって突き進んでいる今。その一つ一つが私たちにとってかけがえのない大切な経験です。苦しさを楽しみに変え、希望を追求するひたむきな姿勢は、能高生の自信と誇りです。

樽子山に校舎が建てられてから八十年の月日が経ちました。その間に多くの先輩方が卒業されていき、今では各分野でご活躍されていることは大きな喜びです。同時に私たちも先輩方を見習い、自分の可能性を信じ、力強く歩んでいこうと思っています。

記念すべき八十周年の年に生徒会に携わった私は、先輩方から学んだ大きな意思を胸に刻み、文武両道の精神で能高祭、生徒総会、十里強歩などいろいろな活動を大成功へと導いてきました。

高校三年間は、あつという間に過ぎてしまいました。しかし、私たちはその三年間に、いろいろなことを学び、生きる力を身につけ、良き先生方とすばらしい友に出会い、たくさん思い出をつくることができました。そして、「至誠力行」の校訓のもとに、これからの社会を担う人間として豊かな心と正しい判断力を養うこともできました。その貴重な三年間で身につけたことを、次のステージで余すことなく存分に発揮したいです。これからもあの「自在の像」のようにたくましく、自由な発想や凜とした自己を持ち続けられるよ

うな能代高校であることを強く願っています。

応援団長として

三年 桧 森 祥 生

創立八十周年。自分はまだ十八年も生きていないので、この八十年という年月が一体どのくらいのものなのか実感がありません。しかし、先生方や卒業生の方々のお話を聞くと、この長い月日の間に素晴らしい伝統が作り上げられてきたことが良くわかります。

さて、伝統と言えば応援団もその一つと言えます。自分は応援団長を務めていますが、卒業された先輩方とよくお話する機会があります。そこでいつも決まって言われるのが、昔の応援団と今の応援団の違いについてです。応援の型は代々伝わる伝統的なもの、というイメージがありますが、実際は毎年毎年少しずつ変わってきているようなのです。ある時には、団内の規律や応援団の立ち場、その在り方などを熱弁される方もいらっしゃいました。このようにたくさんさんの話を聞くと、伝統というものの大切さがひしひしと伝わってきます。しかし、その反面「伝統は大切なものであり、代々伝えて残していくべ

きものほしつかりと伝えていくべきだ。しかし、発展させるべき所は積極的に変えて新しいものをつくっていくことが必要ではないのか。」とも思います。

以上のことから、自分は後輩達にこのようにアドバイスをしたいと思います。「能代高校の伝統を残す事は大変重要であり、是非そうしていつてほしいです。ただ、伝統はまずはつくり上げなければ成立しません。だから新しく自分の手で生み出す。これもまた同じくらい大切なことではないでしょうか。」

自分自身、応援団長としてこれからしっかりと伝統を守り、さらに新しい伝統をつくることに挑戦をしていくつもりです。新しいことに常に挑戦し続ける、これはとても大事なことだと思います。

現在、そしてこれからの能代高校生にはこのようなことを心にとめて日々の生活を過ごしてほしいです。今後の能代高校生の活躍、能代高校の躍進を期待しましょう。

能代高校で生活して

三年市川 志穂子

私が能代高校に入りたいと思ったきっかけ

は三つあります。一つ目は、地元の高校であり、通学時間があまりかららないこと。二つ目は、大学への進学を目標としていたのでそのための勉強ができること。三つ目は、たくさんの人との新しい出会いがあるだろうと思ったことです。実際に入学してみると、期待通りのことも、また、見事に驚かされることもありました。

まず驚いたことは、この学校にいる人達のエネルギーです。熱意のこもった授業をしてくださる先生方、そして授業に真剣に取り組む生徒。しかし真面目なだけではありません。能高祭や十里強歩といった行事のときには、教師も生徒も、先輩も後輩も、伝統も新しさも何もかもが一つになって盛り上がります。学校全体のエネルギーが最高潮に達する思い出の瞬間です。

そして、期待通りだったこと、今までの私の高校生活の中で一番大きな存在だったものは、友人達との出会いです。同級生との毎日の生活や学校行事の準備、新しいことに挑戦したくて入部した演劇部の仲間達。時には衝突したりすれ違ったりもするけど、笑い合ったり励まし合ったりすることの方がずっと多くすばらしい友人達に恵まれました。一生付き合っていきたいと思える友情がここにあります。

私を今まで支えてくれたのは、友人達だけ

ではありません。最も身近で、たまに忘れてしまいたいなりそうなるほど身近すぎる家族の温かさにもどれほど助けられたことでしょう。高校生になってやっと、その有難さをつくづく感じています。

二年間という私が能代高校で過ごした時間は、八十年というその歴史に比べると短いものですが、私の人生においてはとても重大な意味をもつ時間であると言えるでしょう。これからの能代高校に期待することは、人々のエネルギーで満ちた学校として、そして希望や未来との出会いの場所として、さらに大きく成長してほしいと思います。

能代高校に思うこと

二年山谷 幸太

「能代高校」、地元の僕達には小学生の頃からそう聞くと「頭の良い人が集まるところ」というイメージが強くなりました。また中学校に上がりいろいろな高校について調べてみると、能代高校は勉強だけでなく、野球や柔道、体操なども強く文武両道ができる環境の整ったすばらしい学校であると分かりました。それ以来、僕達は能代高校を目標にして受験

勉強に励んでいました。

そして、いざ入学してみると様々なタイプの生徒や先生がいることにとても驚きました。勉強、部活に命をかける人、人が真似できないすごい技を持つ人、今まで見たことのないほどの強い個性を持つ人などがいました。そのような人達と接していくなかで今まで自分に無かったものを得たり、価値観などが変わったりました。また、昔から思っていたように部活と勉強でがんばり、見事に文武両道に励んでいる人がたくさんいます。僕自身も空手部に入っているのですが、部内だけでも考査で二十番以内の人が三人います。

さらに、行事も豊富にあり、とても楽しい日々を送っています。特に十里強歩はとても印象に残っています。友達と一緒に歩いたり走ったりして友情を深めながら、ゴールした時の充実感是一生の思い出となっています。

僕自身、この能代高校に入り自分を高めることができたと思えますし、僕達の先輩方もそうだと思います。この学校は文武両道を目指し励む人が多いので共にがんばっていける場所だと思います。こういう場所はとても貴重な場所だし、ここで過ごす時間はとても有意義なものになると思います。

僕は、まだ一年ですがいずれ学校の中心となったら、今のこの環境を残し、さらに発展させていけるようにがんばりたいと思います。

す。また、僕達が卒業した後もずっと、「能代高校」が能代高校であってほしいと思います。

能代高校での生活

二年 畠 山 愛 未

私がこの能代高校へ入学してから早くも一年が経ちました。入学した当時は能代高校に入ることができた喜びでいっぱいでした。

しかし、そんな高校生活も中学校とは比べものにならないくらいの課題や予習、復習などたくさんあり、能代高校に入学したことを後悔したこともありました。それでも今ではそんな生活にも慣れ、多少手を抜く事を覚えた事もあって楽しい学校生活を送っています。これまで初めてのテスト、初めての文化祭、体育祭、強歩とたくさんさんの経験をしてきました。その中でも体育祭のリレー競技で一位になれた事は応援していただけた私でも特にうれしい出来事でした。

先生方や先輩などたくさんの人を手本として、毎日失敗や試行を繰り返して、たくさんの方々と触れ合う事ができました。まだ一年、もう高校生、という複雑な気持ちで過ごした

一年でした。それでも中学校の頃と比べると幾分か成長したような気がします。

私がこの能代高校で過ごした時間は、十六歳まで生きてきた中のたった一年。今までの人生と比べても、また、能代高校の歴史から見てもとても短い時間ですが、かけがえのない大切な日々になりました。

これから二年、三年となり、能代高校の伝統を守る立場になります。今までずっと守り続けた伝統はもちろん、変化してきたものも、より良くなるように努力していきたいです。私たちのずっと上から続けられている伝統を私たちの代で終わらせることなく、後輩へ伝えられたら、と思います。そして、今の先輩方がやってくれたように、後輩に対して優しく、頼りになる存在になりたいです。そのために、今できる小さな事から積み重ねてやっていこうと思います。

能代高校生としての目標

一年 雄 鹿 高 弘

入学式の日から、約二ヶ月が経ちました。一年生の僕たちも、少しずつ高校での生活に慣れてきました。授業、部活動、土曜学習と、

どれも充実しています。そのため、一日一日が、とても大きな意味を持つものになっています。だから、この能代高校に入学して勉強できるということは、将来のためにも、とても良いことだと思います。

今年は、秋田県立能代高等学校八十周年の記念すべき年です。その記念すべき年に入学した僕たちは、使命感のようなものを感じています。

能代高校の校訓は、「至誠力行」です。能代高校生として、この校訓を常に念頭において生活しようと思います。そうすれば、必ず得られるものがあるに違いありません。

また、能高生として目指すべきものが「文武両道」です。九月には十里強歩があります。勉強ばかりではなく、スポーツでも頑張り、心身ともに鍛えていきたいと思っています。

勉強には意欲的に取り組み、授業に集中し、予習と復習を怠ることがないようにしたいです。また、週末課題や小テストなどにも、学力向上のために頑張つて取り組んでいきたいと思っています。毎日の積み重ねによって、授業の中で学んだことを、しっかりと覚えたいと思います。

大学についても知っておこうと思います。進路について知り、考えることは、とても大切なことだと思います。能代高校では、文系、理系、理数系の三つのコースがあるので、進

路目標に合わせ、慎重に選択しようと思います。

八十周年を迎えたこの秋田県立能代高等学校は、とても素晴らしい高校だと思います。なぜなら、能代高校は、とても雰囲気の良い高校だからです。この素晴らしい高校で勉強して良い影響を受け、「至誠力行」と「文武両道」を座右の銘にして、多くのことを学んでいきたいと思っています。

初心忘るべからず

一年 小林 愛

「冬来たりなば春遠からじ」というように人生最初とも言われる正念場を迎え、一人ひとりに、それぞれの「春」が訪れた。私たちが待ち望んでいた、夢の高校生活の始まりである。

今年度、能代高校は創立八十周年を迎えるという事で、このような歴史、伝統ある学校に入学出来た事を大変嬉しく思う。熱心な先生のご指導の下で学習出来る環境と、素晴らしい先輩方に恵まれた事を誇りに思い、これからの高校生活を存分に満喫していきたい。これから、全校生徒が団結する大きな行事が

次々と行われていくわけだが、期待感で待ち遠しい限りだ。体育祭、能高祭、強歩大会等、いずれは私たちが先頭に立ち、後輩を引っ張っていかなければならない時期がやって来る。一年生のうちから、先に待ち構えている事に対してもしっかりと自覚し、先輩方を良き手本として、いつまでも伝統を守り続けていけるよう頑張りたいと思う。

「まだ一年生、まだ二年生、」中学時代はそうやって逃げては楽な道を選択していた。しかし、中学校と高校には大きな違いがある。高校が義務教育ではないという事だ。つまり、周囲は皆似たような目標を持ち、この場に在る。少し気を抜けばおいて行かれる、そんな世界だ。だから、個々の目標を常に見失ってはいけなく考え、三年間能代高校で過ごしていく上での、一つの目標を立てた。「限界を知らぬ人になれ」。限界だと考えてしまうのは、心の弱さ。まだまだ出来る…そう信じて、自分にだけは決して妥協しない精神力を身に付けたい。それが、勉強に、そして人生にも大いに生きてくると思う。

人は環境に慣れると気を抜いて妥協してしまふことがある。しかし、そんな時はあの日の事を思い出してみたいものだ。私たちに「春」が訪れたあの日。